巻頭言

身辺雑記

安江 朝光 やすえ よしみつ
フリー工業株式会社 技術顧問

平成11年8月に（財）砂防･地すべり技術センターを退職してから、早いもので8年近くになります。同年9月から日特建設(株)に入社し、民間会社の生活を体験することになりました。定刻の会議でもメンバーが揃うとただちに始まるなど、多少のとまどいもありましたが、比較的自由な立場だったこともあって、違和感はほとんどありませんでした。定例の技術開発会議ではなにかと意見を求められたり、またいろいろと技術的な相談を受けたりしましたが、入社してまもなく体調を崩したこともあって、平穏な勤務が続きました。

官とのいちばんの差は利益を求めることが第一義である点で、現場での技術についても他社より優位に立つことが大切で、“他社との差別化”がキーワードでした。現在、建設業の経営環境がきびしいこともあって、今日の利益が優先し長期的視野に立つ余裕が感じられないことがしばしばありました。その点、（財）砂防･地すべり技術センターは、その置かれた立場からできるだけ中長期的な視野で動いてほしいと思います。私が関係した分野での我田引水的な話で気が引けますが、急傾斜地では、防災だけでなく、生態系も含めた自然の保全など多面的な視野に立った取り組みが求められています。端的にいえば、できるだけ斜面に自然（樹木）を残して住民の方々の生命と財産を保全する対策になるでしょう。「緑の斜面づくり調査・設計－緑の斜面工法整備の事例集」が平成17年に砂防センターから出版されていますが、これはその方向での最初のステップだと思います。現在のわが国の財政事情では、このような事業を進めるにはいろいろな困難がありますが、中長期的には必要な技術ですので、ぜひ事例集の続編を進めていただきたいと思います。

技術的には、斜面安定に関連して根茎分布と地盤強度および変形性との関係の研究と、樹木の転倒が斜面安定に及ぼす影響の把握をさらに行う必要があり、また崩土から住宅を待ち受け擁壁などで守ることに関連して、樹木を含んだ崩土の衝撃力を正しく求める必要があります。これらの解明を進めて技術を体系化することについてもイニシアチブをとっていただきたいと思います。

官との比較ですばらしいと思ったのは、何か重要な案件が持ち上がった際、所属する部署に縛られることなく、適した人をすぐ集める効率的なやり方でした。このようななかで、技術でも営業でも即戦力のある人が育ってきます。

平成17年3月に日特建設(株）を退社しましたが、また昨年8月から非常勤でフリー工業(株）に勤めるようになりました。ちょうどこの間、全国治水砂防協会の機関誌に「砂防と私」の題で大学卒業の頃から日特建設(株）退社までのことを書く依頼を受け、あらためてこれまでの歩みを振り返る機会を与えられたという思いがありました。

当社は100人ほどの規模で、社名はなじみが薄いと思いますが、のり面対策工として開発した「フリーフレーム工法」は、この分野では割合に知られていると思います。防災、環境、維持管理の仕事が経営の柱であることはこの種の会社ではいずこも同じで、公共事業の減少が続くなかで受注するのは簡単ではありません。

それを補うために、少し前から、間伐材を使った木製カーペットを開発して一般の建物の床に使ってもらう分野に進出しています。この分野も競争ははげしく事業量も現在は少なく、将来的にうまくいけばといったところです。建設業の性格上、自動車産業と同じようなグローバルな競争は難しいと思いますが、もう少し海外市場への進出が実現すれば、新しい空気が入るのではないでしょうか？

また、ほかの産業と同じで競争は必要ですが、過度の弱肉強食的競争は一時的には利点があっても、長期的には業界の荒廃、ひいてはわが国の体力を消耗することになり、国民のためにならない気がします。公共事業の削減にともなう業界の再編成、他事業への人の転出、結果的に安くて良い品物（公共施設）を永続的に国民が買うシステムがうまくいかないものかと誰もが願っていると思います。

知らず知らずのうちに若い人に期待するようになり、その言動が気になるのは、やはり自分がいつの間にかそのような年齢になったせいでしょう。

元当センター専務理事（平成8～11年在任）
平成18年11月　瑞宝双光章　受章